

抜管後気道合併症に対する予防的ステロイドの副作用：観察研究

◆研究の目的と概要◆

人工呼吸を必要とされた患者さんが、状態がよくなられた時点で肺と人工呼吸器をつないでいたチューブを口から抜きます（抜管と言います）。その際に、喉の奥が腫れる危険性があることからステロイドという薬を抜管する前に投与することがあります。海外の診療ガイドラインでは、抜管後に喉の奥が腫れる可能性がある患者さんにステロイドを投与することが推奨されています。日本の診療でも行われることですが、その副作用に関してはよくわかっていません。血糖値があがる、感染症になる、といった副作用を調べるための研究を行っています。当院救急科が主体となって、国内の複数の施設で実施している研究です。過去の診療録（カルテ）の情報を利用します。

◆対象となる患者さん◆

2014年1月から、2018年12月までの間に、集中治療室に入室し、抜管前にステロイドを投与された18歳以上の患者さん

◆研究に使用される情報・試料◆

年齢、性別、身長・体重、集中治療室に入室が必要となった病気、基礎疾患、集中治療室に入室された時点の重症度、人工呼吸、ステロイドを投与した時点で投与されていた薬剤、抜管後や院内での予後、血糖値、感染症、上部消化管出血、せん妄、血栓症、不眠

◆研究方法◆

上記情報を、患者さんの氏名などがわからないようにしたうえで、倉敷中央病院に対してデータを提供し、倉敷中央病院においてデータ解析を行います。

◆共同研究機関及び研究責任者◆

倉敷中央病院（研究責任者：栗山明）が主体となって実施しており、下記4施設が参加しています。

JA 広島総合病院（櫻谷正明）、TGM あさか医療センター（江川悟史）、東京ベイ・浦安市川医療センター（片岡惇）

-
- * 研究成果は学会等で発表を予定していますが、その際も患者さんを特定できる情報は利用しません。
 - * 本研究に関するお問い合わせや、カルテ情報の利用についてご了承いただけない場合、

以下の問い合わせ先までメールでご連絡ください。

【問い合わせ先】

公益財団法人大原記念倉敷中央医療機構 倉敷中央病院

救急科 研究責任者 栗山 明

E-mail: kenkyu★kchnet.or.jp (臨床研究センター)

(★を@に変換して使用してください)

この研究課題で利用する残余検体・診療情報等の利用については、医の倫理委員会によって「社会的に重要性が高い研究である」等の特段の理由が認められ、実施についての承認が得られています。

※【問い合わせ先】では、次の事項について受け付けています。

- 研究計画書および研究の方法に関する資料の閲覧（又は入手）ならびにその方法（他の研究対象者の個人情報および知的財産の保護等に支障がない範囲内に限られます。）
- 研究対象者の個人情報についての開示およびその手続
- 研究対象者の個人情報についての利用目的の通知
- 研究対象者の個人情報の開示、訂正等、利用停止等について、請求に応じられない場合にはその理由の説明